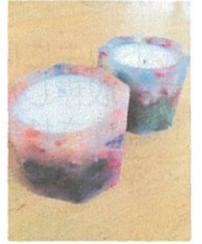




こんにちは！地域おこし協力隊の日向優（ひなたゆう）です。本年度もよろしくお願いたします。2月に開催した「アロマキャンドル作りワークショップ」に参加いただいた方、ありがとうございました！引き続き新しいイベントを企画していく予定ですのでもよろしくお願いたします！

さて、少し間があいてしまいましたが、今回は「**薬用植物はいつまで植物？いつから薬？**」というタイトルで書いていきたいと思ひます。



薬用植物はいつまで植物？いつから薬？

これまで、色々な薬用植物とその多様な用途等についてご紹介してきましたが、原点に戻って、「生薬」について改めて考えてみたいと思ひます。素朴な疑問として、薬用植物はどのようなプロセスを経て生薬になるのでしょうか？

まずはじめに、「オウギ葉茶」でも使用している「キバナオウギ」を例に見てみましょう。

Step 1) 日本薬局方を確認しよう

まず、日本における医薬品（生薬を含む）を定めた公定書である「**日本薬局方（局方）**」というものを確認する必要があります。この局方は、インターネットから誰でも閲覧することができますが、ここの「**オウギ**」の欄には「**キバナオウギまたはナイモウオウギの根である**」と記載されています。すなわち、**これとは違う品種のオウギ類や、キバナオウギの「葉」などは生薬には使用できない**、ということになります。陸別町で栽培しているオウギは「キバナオウギ」なので、その「根」は問題なく生薬になる資格を有していることがわかります。さらに**局方には、その生薬の規格（大きさ、形、成分など）も記載されています**ので、これに適合したものだけが「生薬」として認められるのです。



第十七改正
日本薬局方

Step 2) 加工調製を実施しよう

種から育てたキバナオウギ。2~3年育ててようやく収穫です。オウギは**収穫直後はまだ「キバナオウギの根」**ですが、ここから生薬の世界で特有のプロセスへと進んでいきます。それは、「**加工調製（修治）**」という段階です。**この工程を経てはじめて植物は「生薬」になるのです！**

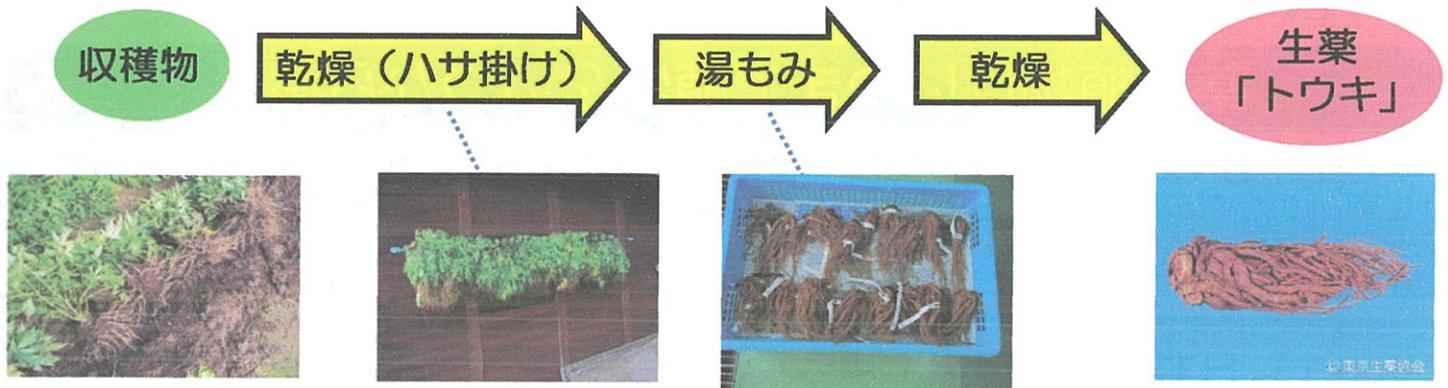


「局方」には、「できあがった生薬の規格」は定められていますが、「**どうやって加工調製するか**」はほとんど記載されていません。インターネットから「**薬用植物総合情報データベース**」を検索する方法や、専門書や論文を閲覧する方法、または専門家に問い合わせることで調製法を確認することができます。生薬によって調製法は異なりますので気をつけてください。加工調製は、洗浄や皮去り、切断、乾燥などがほとんどであり、一部の生薬を除いて、特別に高度な専門技術が必要なわけではありません。実際、薬用植物を栽培する生産者が、加工調製まで実施して取引先に卸すことも多いですし、専用の洗浄機械等の開発も進んでいます。「オウギ」の加工調製は、「よく水洗いし、土砂を落とした後、残った茎を切り落とし、天日で乾燥する」であり、複雑な工程はありません。

一方、オウギとは異なって少し変わった加工調製法を行う品目もあります。以下に、「トウキ」と「ブシ」についてご紹介します。

例①：トウキの加工調製法

トウキには伝統的な加工調製法があり、この方法を実施することで品質を向上させることができます。収穫したトウキ（別名：ヤマトトウキ、オオブカトウキ）の根を、土を落としてそのままハサ掛け乾燥させます。数か月後の水分含量が20%程度になったら、湯につけて揉みながら馬尾形に形を整える「湯もみ」を行い、再度乾燥させることで生薬の「トウキ」となります。

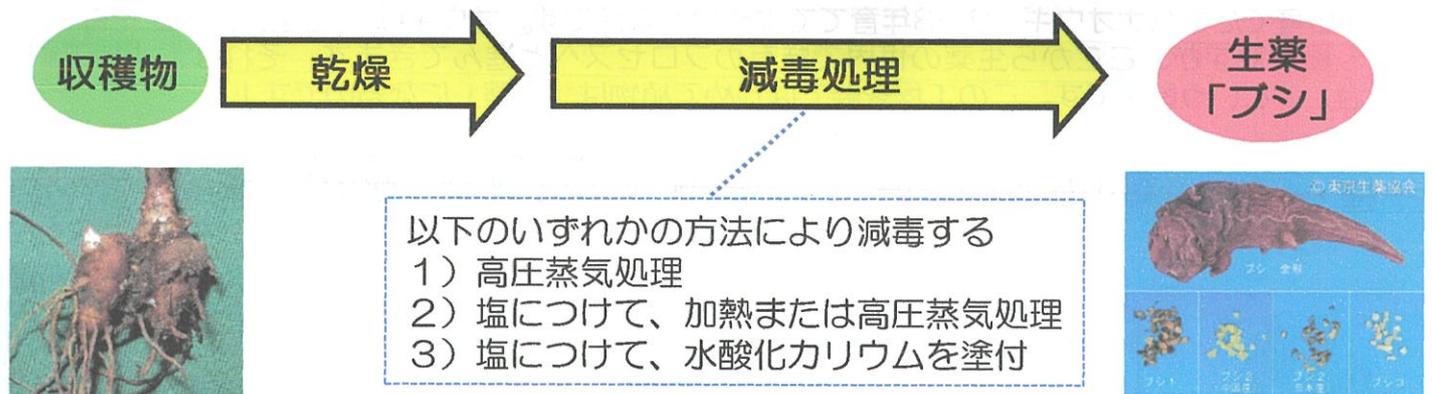


例②：ブシ（トリカブト）の加工調製（修治）法

「加工調製」と似た意味で用いられる言葉に「修治（しゅうち）」があります。修治は、加工調製の中でも生薬の薬効の向上や副作用の低減のための加工法を指す場合が多いです。ここでは、ブシの修治例をご紹介します。

「ブシ」は、ハナトリカブトまたはオクトリカブトの根を使いますが、収穫したのものには毒性のある「アルカロイド類」を多く含んでいます。このままでは、薬ではなくただの毒になってしまうので、毒性を抑える「減毒処理」を行う必要があります。

この減毒処理方法には3パターンあり、いずれかの方法を採用します。どの方法も「強い毒性のあるアルカロイド類」を「ほとんど毒性のないアルカロイド類」に変換します。



この処理は、専門性が高いため、自前で行うのは極めて困難です。収穫した根の部分、すべて取引先に送付して処理してもらう場合がほとんどだと考えられます。

今回は、生薬の「加工調製」にスポットを当てるといふマニアックな回になりましたが、生薬ならではの工程ですので、興味を持った方も多かったのではないのでしょうか。もちろん、今回紹介したのはほんの一部なので、まだまだ加工調製の世界は奥が深いです。疑問点などありましたら、下記までご連絡ください。